

(図4) 実践授業のねらいと具体的な手だて

段階	ねらい	具体的な手だて
課題把握と解決 1・2	<ul style="list-style-type: none"> ○ 既習の技（第1学年～第3学年）の復習をさせ、できない技については、個々の課題とし練習させる。 ○ 新しく学習する技を体験し、練習させる。 ○ 技の繰り返し、連続技を練習させる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 「よさ」の把握 <ul style="list-style-type: none"> ・ 行動特性の調査 ・ 体育科における興味・関心、意欲の調査 ・ マット運動と跳び箱運動の興味・関心、意欲の調査 ・ 運動能力の調査
学習内容の理解と定着 3・4	<ul style="list-style-type: none"> ○ 既習の技を組み合わせた連続技のコースや今回学習する技を組み合わせた、連続技のコースを選び、練習させる。 ○ 技のつなぎの工夫をさせる。 ○ より多くのコースを達成させることにより、基礎・基本の定着を図る。 ○ 班内で発表させる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 「よさ」の把握 <ul style="list-style-type: none"> ・ 学習カードへの助け合いの記録 ・ 運動の復習と技能の向上 ○ 「よさ」を生かす <ul style="list-style-type: none"> ・ 主運動と主運動との組み合わせ ・ 単元計画の工夫 ・ 異質グループの編成による自力解決の場の設定と工夫 ○ 「よさ」の意識化 <ul style="list-style-type: none"> ・ 学習カードの活用（自己評価・相互評価・教師からの評価） ・ 個人カルテの活用（情意面の自己評価） ・ コース別学習の工夫 ・ 異質グループ編成による個々の課題解決の場の設定の工夫 ・ 発表の場の設定
発展学習 5・6	<ul style="list-style-type: none"> ○ 学習内容を生かし、自己の能力に適した連続技を考える。 ○ 独創的な連続技に仕上げさせる。 ○ 上手になった人の工夫点やつなぎのおもしろさを強調し、着目させる。 ○ 班内で発表させる。 ○ 班代表を選出し発表させる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 「よさ」を生かし、伸ばす <ul style="list-style-type: none"> ・ 創作活動での自力解決や、相互協力の場の設定 ・ 学習カードの活用（自己評価・相互評価・教師からの評価） ・ 個人カルテの活用（情意面の自己評価） ・ 発表の場の設定

調査では、児童の学習に対する意欲の持ち方について調査を行い、「よさ」を把握した。

行動特性の調査では、児童一人一人の「よさ」を、教師と児童自身がとらえるために、教師からみた一人一人の特性、児童自身からみた自分の特性についてのアンケートを実施した。そして、「よさ」として教師と児童が一致した項目を、更に一つに絞った。それを見やすく、自分の「よさ」を強調させるために、毎時間学習カードの中央に書かせ、常に自分の「よさ」を意識して学習するようにさせた。

② 授業中における「よさ」の把握

学習カードに自分の把握した「よいところ」を書か

(2) 「よさ」の把握

「よさ」を把握する手だてとして、次の4つの調査を行った。

- ・ 行動特性の調査
- ・ 児童の体育科学習における興味・関心の調査
- ・ マット運動と跳び箱運動に関する興味・関心、意欲の調査
- ・ 運動能力の調査

体育の授業では、児童の課題への取り組み方や集団の中でのお互いの学習活動へのかかわり方の中に個性が表れやすい。

そこで授業では、学習カード（「よいところカード」）を活用して自分の「よさ」に気づかせようとした。

① 事前における「よさ」の把握

マット運動と跳び箱運動の興味・関心に関する

せたり、コピーした似顔絵を毎時間はらせ、絵と文章の両面から、自分の「よさ」を意識化させるための手助けとした。

技能面については、「できた運動と自分を色の線でつないでみよう！」という活動を通して自分の到達状況を把握させ、自分のめあてを達成させようとした。

(3) 「よさ」を生かす指導

① 単元指導計画の工夫

マット運動と跳び箱運動（主運動と主運動）とを組み合わせた連続技ができるようになることを目標に指導計画を立てた。それは、それぞれの運動だけで連続技を考え練習するよりは、二つを組み合わせた方が、多彩なバリエーションが得られ、児童の「よさ」を生かす場面がみられると考えられるからである。